

【66】メートル法150年

今年は、1875年にフランスが音頭を取って先進国を集め、国際的な長さや重さの単位を定める「メートル法条約」が締結されて150周年に当たります。

日本の加入は、10年後の1885年（明治18年）ですが、伝統ある旧来の「尺貫法」のシステムと長期にわたって併用され、完全にメートル法システムに移行したのは、60年前の1966年（昭和41年）の事でした。

以来、法的に保護される取引、検定、証明等の世界ではメートル法によることとされており、取引の分野である商品の売買の標示も長さはメートル系、重さはキログラム系です。

こうして現在のわが国では社会的にもメートル法が定着し、メートル法以外の単位の呼名には違和感があるようです。

しかし、度量衡は社会と文化の基本ですから、種々の活動分野で旧来の尺貫法の単位が慣習として残っています。

特に建築や不動産の世界では広さの単位の「坪」が今だに使われており、マンションの広さは m^2 （平方メートル）で表すのに、貸ビルの家賃は“月坪2万円”と言ったりしています。

わが国が80年がかりでメートル法に移行したのに対し、メートル法条約の当初加盟国のアメリカは今だに伝統的な「ヤードポンド法」の天下です。

そのため、大谷のホームランの飛距離はフィートで、ピッチャーの投球の速度はマイル/時で伝えられるのを、メートル系に換算して報道されます。ゴルフの世界はどういうわけかヤード万能で日本でもヤードですね。

文学の世界でも海外の作品の翻訳で、単位を機械的にメートル法に置き替えたものも多く（翻訳者でなく編集者か出版社の手かも）、小数点以下の端数がついていたりして鼻白むこともあります。

TVのアメリカ発のパニック映画で、列車が暴走する場面がありましたが、マイルで展開されている世界を無理にkmに直すので、パニック状態なのに急に数字に細かく緊張感に欠けました。

機関車の運転台の速度計をアップで映して、60（マイル/時）の標示なのに日本語のセリフでは96キロと叫ぶので、エッと思いすぐにわけがわかって笑ってしまいました。